

C・ワーバートン

『シムムペーター学説における貨幣および景気変動』

Clark Warburton, "Money and Business Fluctuations in the Schumpeterian System," *The Journal of Political Economy*, LXI, December, 1953.

浜 崎 正 規

は し が き

シムムペーター(J.A.Schumpeter)の革新(innovation)は、いわば新しい生産函数の設定であり、その作用様式は、明らかに景気変動のメカニズムを構成する。しかしながらこの質的变化の作用と、統計的に示された変動の量的な記述とは、直接に結びつくことをえない。このために彼は、中間項としての歴史的分析を不可欠なものとして重要視する。すなわち景気変

動の背後にあつて、一つ一つの循環を歴史的個性と化せしめるような要因と作用をこそ、重視しなければならぬのである。シムムペーターは、『経済発展の理論』("The Theory of Economic Development")で「単に外的の要因のみに依存せずに経済体系を一つの均衡から、他の均衡に推進して行く経済変動の純粹に経済的な理論」を提示するようつとめていたのであるが、これの理論的・統計的・歴史的な実証に向つての体系化による『景気循環論』("Business Cycles")に

において、変動要因ならびにその作用の歴史的個性認識をより明確にすることに努力する。

ここに紹介するワーバートン氏の論文は、シムムペーターのいわゆる「景気変動」ならびに「経済変動」についての諸文献に対する包括的、方法的吟味、および理論的整理を試みた論稿として、シムムペーター学説の研究上看過すべきならぬものである。紹介の手がかりとしてシムムペーターの変動理論に関する文献を年代順に挙げて置く。

- (1) "The Theory of Economic Development," English trans. Cambridge: Harvard University Press, 1934; 2d. ed., 1936)
- (2) "The Explanation of the Business Cycle," *Economica*, VIII (1927), 286—311
- (3) "The Instability of Capitalism," *Economic Journal*, XXXV VIII (1928), 351—68
- (4) "Mitchell's Business Cycles," *Quarterly Journal of Economics*, XLV, (1930—31) 150—72
- (5) "The Present World Depression: A Tentative Diagnosis," *American Economic Review*, XXI (Supplement, March, 1931) 179—83

- (9) "Depression," in *The Economics of the Recovery Program* (New York: McGraw—Hill Book Co., 1934) pp. 3—21

- (7) "A Theorist's Comment on the Current Business Cycle," *Journal of the American Statistical Association* XXX (Supplement, March, 1935), 657—68
- (8) "The Analysis of Economic Change," *Review of Economic Statistics*, XVII (1935), 2—10; reprinted in *Readings in Business Cycle Theory* (Philadelphia: Blakiston Co., 1944), pp. 1—19
- (6) "Business Cycles: A Theoretical Historical and Statistical Analysis of the Capitalist Process" (2 vols.; New York: Mc Graw-Hill Book Co., 1939)

- (3) "The Decade of the 'Twenties,'" *American Economic Review*, Proceedings, XXXVI (1946), 1—10
- (11) "Theoretical Problems of Economic Growth," *Journal of Economic History*, VII (Supplement, 1947) 1—9
- (12) "Wesley Clair Mitchell (1874—1948)," *Quarterly Journal of Economics*, LXIV (1950), 139—55
- (13) "The Historical Approach to the Analysis of Business Cycles," in *Universities-National Committee Conference on Business Cycles* (New York: National

Bureau of Economic Research, 1951, pp. 149—52

さてワーバートン氏をまつまでもなく、景気変動理論の分野における故シユムペーター教授に対する声価は、景気循環において、指導的、端緒的な勢力としての企業者活動、ならびに革新についてのすぐれた関心に帰するということは、周知のところである。しかしながら彼はまた、いわゆる経済史上の景気の停滞・恐慌ならびにインフレーションに対する特定のな原因の勢力として、経済体系の「外部的要因」(external factors)に同様な関心を与えているのである。一般的にいえることは、シユムペーター学説の認識として不十分であるが、いわば貨幣創出機関としての銀行を、前に述べた兩部門のうちに重要な位置づけを与え、しかも兩部門において相異なる役割を演じるものとして考えられているということである。すなわち銀行を、景気循環の革新の理論において非端的、ならびに必然的のなしかも強調的な要因として、また特発的変動における、あるいは深淵な不景気になる周期的後退におけ

る、独立した原因の勢力として認識されているのである。しかしながらシユムペーターによって、いろいろな原因的、強調的要因の衝突をあとづけることについて、あるいは分離することについて、どのように鋭い方法論的示唆がなされているかということに関しては、一般的に認識されていないということができよう。このことからワーバートン氏は、次の三つの目的にしたがってシユムペーターの景気変動理論についての方法論的吟味を企てる。(一)シユムペーター景気変動理論の兩部門における貨幣および銀行の役割について、彼の著述を通して考察の脈絡を概観し、批判をする。(二)そのため、革新の衝突から貨幣の衝突をできるかぎり分離する時に、景気変動を調査する方法を暗示した彼自身の著書のうちにそのいとぐちをみいだしていく。(三)彼が反対したいわゆる景気変動についての古典的貨幣理論をもって、その複合理論の兩部門を結合し、そうして調和を保った景気変動の理論を概観する。これらの目的のために氏は、それぞれ次のような項目の

もとに論をすすめる。すなわち、(A)景気変動についてのシユムペーター学説における貨幣の役割。(B)シユムペーターの論議から推論される景気変動についての研究上の方法論。(C)経済発展および景気変動についての総合的革新理論ならびに貨幣的不均衡理論がそれである。われわれはなるべく著者の叙述を追って、以下問題点を紹介してみよう。

(A)

シユムペーターは一九三五年に公にした論稿(“The Analysis of Economic Change”)で、景気の後退上昇における第三の論理的に明確な要因として革新に言及したのである。その場合彼は、産業上の変動は、生長の非周期的要因ならびに革新にとっての外部的要因の結果であると述べる。(Ibid. p.7)しかしながら一九三九年の『景気循環論』においては、変化の内部的な明確な要因として革新をとりあげ、次のような簡結な論述をしている。すなわち経済変動は、外部的要

因、生長および革新によるものであると。(Ibid. pp. 26,27)けれどもこれらの勢力のうちの一つのグループである生長は、均衡の持続をなら妨げるものではなく、他の二つのグループは、均衡状態の攪乱を現出するものであり、そうして景気変動をもたらすのはそれらの攪乱である。そこでシユムペーターは、「今や何が変動原因であるかは、いわば外部から経済体系自体に衝突をする個々のな衝撃でもあり、あるいは体系自体によって一般化された変化の明白な過程であるかもしれない」というのである。(Ibid. p.68) このような論述からワーバートン氏は、シユムペーターの景気変動の理論は、(一)景気循環の理論、あるいは革新の勢力および企業者の活動が根本的な原因的要因として注目される景気の上昇振動、下降振動の回帰的交替の理論。(二)経済体系の反応から外部的要因へ生ずる経済的事情のなだらかな過程についてのいろいろな妨害、および非常に変態的な不景気の理論、ならびにインフレーションについての理論であると整理を試みる。そ

うしてまさに複合的理論の構想において、シムペーターの景気変動の理論は組立てられているという。そこでワーバートン氏は便宜上前者を景気変動の『革新理論』(innovation theory) 後者を『衝動理論』(shock theory) とよぶことにし、それぞれを景気循環の理論、および周期的変動から区別する主要な攪乱の理論と性格づける。

シムペーターが、企業者および革新の衝動の役割と同様に外部的要因の衝動に強い関心をもっていたことを、われわれはたとえそれが、彼の著述に現れる機会が尠いからといって看過してはならない。われわれは、彼が「外部的要因は常に重要であり、そうして時には指配的なものでもあり、それらの外部的要因に対する体系の反応は、われわれが観察する経済変動についての主要部分を説明するためにつねに期待されねばならない」「攪乱は、永久に経済的發展の周期的過程を抹殺するかのよう非常に勢力的であるかもしれない」(Ibid. pp. 72, 256) という声に耳を傾けるであ

らう。かように企業者活動についてと同様に、充分な関心を外部的要因に注いだ彼は、米国の十七・八世紀の経済史的歴史事実に論及するのである。(Ibid. pp. 249, 286) そうしてシムペーターは、経済生活におけるすぐれていちじるしい変動は、周期的動揺の問題であるとしてよりは、国家的政策の問題として重大であると認識したのである。景気変動の分析に関する最後の論稿 (“Historical Approach to the Analysis of Business Cycles”) で資本主義的生活の悩みの種の景気の低下と、そうして景気循環のメカニズム、ならびにその過程の局面としての景気の後退との相違を強調したのである。この論文において彼は、「周期的な景気の抵下の最も険悪な状態、およびすべての階級にとっての妖怪を景気循環で理解するあらゆる事情は、景気循環にとって本質的ではない」ことを論じ「景気変動についてのこれらの観察は、周期的メカニズム自体に干渉することなく排出されることができる状態である」という。(Ibid. p. 150) そこでワーバ

ートン氏はこの所論について次のように展開する。すなわち、ともかくその説明によれば、シユムペーター

は、景気変動の革新理論よりも経済政策にとってより一層の影響のように景気変動の衝動理論を注目したことである。景気の停滞、回復の周期的変化のもとにおける作業として、因果関係の過程を観察し分析する場合に、彼は銀行の役割が景気事情の決定にとって貨幣的膨脹あるいは、収縮に応じて指配的であると論じていることである。特にシユムペーターは、企業者の革新活動に反映する決定にとって、また景気循環の源泉である革新理論をひろめることにおいてそうであると論じているのである。

シユムペーターは、先輩ならびに同輩のいわゆる貨幣的景気循環理論に反対したのである。しかしながらそれは、銀行組織の作用効果による不景気、インフレーション、あるいは政府の貨幣政策そうしてそれらの前者と後者を一緒にした場合の不景気、インフレーションに対して研究的態度を表明する学者の見解と、只

単に本質においてわずかに相違する考えを明らかにしたといふべきである*。

* ワーバートン氏はこの点について次のような註を附している。

シユムペーター理論のこの側面は、シユムペーター学説を概説しあるいは景気変動理論に対する彼の貢献を評価することを企てる学者によって無視されてきているところをみると明らかになる。すなわちクレメンズとドウデーの『シユムペーター学説』ならびにアルサイン・H・ハンセン教授の『景気循環理論に対するシユムペーターの貢献』(“Schumpeter's Contribution to Business Cycle Theory”, *Review of Economics and Statistics*, XXXIII, 1951, 29—32) ならびにシユムペーターの革新景気循環理論について反対すべき特徴を排除することを企て、あるいは貯蓄投資理論(特にヒックスの理論)でもってシユムペーター学説の他の部分を綜合することを企だてているR・フェルス教授(*Rendig Feis*)の論文『景気循環の理論』(“The Theory of Business Cycles, Quarterly Journal of Economics, LXVI [1952] 25—42) においてもさうである。フェルス教授の総合的理論の特徴の一つは貨幣的要素が原因的役割を演じることができるといふ認識である。特に upper turning points および下降振動の強調においてさうである。ともかくフェルス教授は

この認識をヒックスに最初にもとめるのである。そして貨幣理論に対するシユムベーターの貢献の殆んどを無視する。そうしてまた不景気ならびにインフレーションにおける貨幣の役割を無視するのである。

さてシユムベーターは、死の直前においていわゆる

好景気・不景気は、景気循環（内生的変動）のメカニズムならびにその過程によって説明されるのではなく、一般的に機構化された銀行組織によって援けられている完全に強力な、しかもえい智的である政府によってさげることができぬ／＼冒険的な事柄／＼によるという考えを明らかにしたのである。（“Historical Approach to the Analysis of Business Cycles”, pp. 150—51, 153）ともあれシユムベーターは、経済を激動させる外部的要因の広範な多様性を認識したのであるが、これらの外部的要因がとりあげられる場合、二つのグループに分類することができる。ワーバートン氏は、これを貨幣的要因と非貨幣的要因とのグループのうちを観察する。

貨幣的要因……（一）偶然の発見による金生産の変化。

（二）国際的金移動のような形。 （三）改鑄貨幣闘争。 （四）インフレーション的銀行業。 （五）デフレーション的中央銀行操作。

非貨幣的要因……（一）戦争、革命、戦争の危険、社会的不安。 （二）自然的大異変。 （三）発展、租税、関税、商業政策、統制規則等のいわゆる制度的変化。 （四）宗教的圧迫等による移住。

このように景気変動に関するシユムベーターの作業における理論の二元性の認識、ならびに理論の両部門における貨幣要素の重要性の認識（特に衝動理論において）は、彼自身の労作のうちに解答をみいだすことのできない興味のある問題を提出するのである。すなわち

（一）景気の後退あるいは上昇は、革新理論に加うるにむしろ衝動理論の関連において説明を要するのを異常であるとする範囲の境界線は何であるか。例えば、

一九三七年から三八年にかけての途方もない、しかし比較的短い不景氣が定められるのは、どちらのグループであるのか。

(二) 衝動理論は、景氣変動の貨幣的諸理論にどのように厳密に関連しているのか。このことは更に次の二つの問題の解決をまつのである。

(i) 不景氣ならびにインフレーションの歴史的研究がなされる場合、多くの状態において指配的であり原因的に戦略的である、外部的要因が性格として結果的にどうして貨幣であることになるのか。

(ii) 適度の上昇・下降の交替にもとづく景氣の後退ならびに回復のリズムよりも、むしろひどい不景氣およびインフレーションに、方向を与えている景氣変動の貨幣理論は、どのような程度であるのか。

もし先ず最初にこれらの疑問が現実的の概念において、合理的に導かれた境界線によって解決されるなら、そうしてまたこの第(二)の問題を追求することによって歴史的研究が深淵な不景氣およびインフレーション

ンにおける指配的外部的要因である貨幣的勢力の孤立を導くのであるならば、不可避的にいわゆる当然考察を必要とすることがらとしてこの問題は目立って現れるべきである。

(三) もし貨幣的勢力、銀行勢力が深淵な不景氣および激しいインフレーションにおける根源的外部的要因であるとみなされるならば、国民経済研究所 (National Bureau Economic Research) の景氣循環參考期日によって検証されたより一層適切な上昇および下降についての多くの殆んど根本的な解釈は、さらに適切な状態において起きている同様な勢力ではないかもしれないのではあるまいか。

(四) 銀行の活動は——銀行の作用ならびにそれらの機会に衝突する外部的要因に対する反応において——企業者前の機会の有利さに関して因果的影響のようにな振舞うということであろうか。このことからして、シムペーターの革新理論の本質的部分である革新の群生、ならびに隆起において銀行の行為は、主要

な因果的勢力であるということができようか。

(五)もしも前にのべた二つの問題 (i)(ii) が肯定的に解決されるならば、シユムペーターによって産業上の変動についての自動的貨幣的原因 $\text{\textcircled{R}}$ と循環のメカニズムのために特定の観念に入るそれらの貨幣的原因 $\text{\textcircled{R}}$ との間について考察されているのよりは、その区別がむつかしくなるのではなからうか。

このようにシユムペーターの景気変動論の二元性の認識と、そうしてそれぞれの理論と貨幣要素との関連的認識にもとづいて、ワーバートン氏は五つの問題を提起した。われわれはこれらの問題点の解決への手がかりとなる方法論的叙述をうかがってみよう。

(B)

シユムペーターは、不景気状態に対して反応しがりである事柄を除去するために、そうして景気循環に起りがちである不安を望ましい範囲に縮小するための政策計画を發展するため、 $\text{\textcircled{R}}$ 歴史的個体としての循環 $\text{\textcircled{R}}$

について論議をし、説明をするのである。その場合彼は、あらゆる循環のいわば $\text{\textcircled{R}}$ 歴史的分析 $\text{\textcircled{R}}$ を暗示したのである。("Historical Approach to the Analysis of Business Cycle," p.150) 初期の論文においては、 $\text{\textcircled{R}}$ 決定的状態において作用する外部的要因を孤立化する手段として、景気変動の歴史的研究の必要を強く主張したのである。そうして歴史的・統計的・分析的な研究方法の方式を整理する必要を述べた。("The Analysis of Economic Change," p.2) また他の場所では「われわれがデフレーションの危機について議論しなければならぬか、または正常な循環の不景気について論議をはさまなければならぬかということ、いわば性格の異ったにわか景気を較べて明確にすることは、実践的に注目し得る重要なことである。そうしてそのことは、診断や救済的政策のためにそれら両者の大きな相違を明らかにすることである」と述べているのである。("The Explanation of the Business Cycle," p.294) しかしながら景気循環に関する最後の

論文では彼は、景気循環を歴史的個体として論ずるのである。すなわち記録上の一切の循環へ歴史的分解を要求する知識の性格について附加的註釈を加えるのである。このようにして彼は、歴史的作業については次の三つのタイプが究明されなくてはならないという。すなわち(一)長期の統計的系列の展開ならびに吟味。(二)分析的記述。(三)産業的場所的論攻である。さて

ムペーターの態度を鮮明にする。われわれはその所論に耳を傾けよう。

歴史的研究のこれらのタイプについてシムペーターの註釈は辛辣であるが、けれどもそれらは、研究的精神において常に充分保たれなくてはならないものであって、非常に適切であるといえよう。われわれはこれらの作業上の三つのタイプが、どのようにして貨幣的勢力や銀行勢力に集中することができるかを考察する必要がある。もしも歴史的研究が前節(A)で提起した疑問に対して何らかの解決をみいだすよすがとなるならば、その疑問に対しての興味の焦点は、全く必然的なものであろう。以上のように考察をしてくるワー

シムペーターは、不可欠なものとして長期的な統計上の系列の編輯に意を注いだのである。すなわちそれは二十五年よりもはるかに長時代を長期間々によって意味する統計的系列である。彼は最底限度として、二五〇年の一時代の量的考察および深重に期日を決定した理由を暗示したのである。 (“Business Cycles,” p. 220) そうして統計上の系列の分析および展開の両者において、理論的組織を使用する必要を強調した。

パートン氏は、これらの三つのタイプについてのシム

すなわち「われわれの論理が可能的図式の領域外にある」という觀念において、統計的方法は一般的でない。それらの統計的方法は、適応している諸形式の理論から脱皮しなければならない。……ある時代の経済的現象の分析は、現象をもたらず経済事実から進めねばならないのであって、それらの現象から生ずる貨幣的集団からすすめられるのではない」と。(Ibid. p.199) このようにして、銀行勢力や貨幣的勢力の領域に属す

るそれらの外部的要因に集中化した統計的系列を展開するために、外部的要因の他のタイプから貨幣的および銀行的諸勢力の要因を分離することは、必要なことである。またそのことはシムペーターの生長の論議の拡大化にとって必要なことでもある。ところで彼は生長のからみ合を、革新による結果ならびに外部的要因の結果をもって認識したのであり、そうして生長と統計的傾向の間を注意深く区別したのである。（“Business Cycles”, p.494）しかしながらともかく循環について、あるいはアブノーマルな不景気、および生長についてのデーターからのデフレーション等いずれの観念においても、景気変動に関する事実上のデーターから分離するために、 \times 生長 \times 概念は、革新の衝動のかような部分をカバーすべきである。そうして外部要因は、全体として経済に関する根源的な変化物において長期的傾向を具体的に表現されるのである*。

* ワーバートン氏は註を附して次のようにいう。すなわち、生長についてのこの論述の拡大は、性格的には重要

であるがしかしながら生長に関するシムペーターの根本的定義の関連においては、さほどではない。シムペーターが「われわれは生長によつて、単位時間の増長・減少が認められる攪乱のない組織によつて、一般的に併呑されることができるといふ観念において、継続的に起る経済的データー内の変化を意味する」（“The Analysis of Economic Change”, p.4）と云う場合革新および革新の結果が、景気進行の正常な部分として起る領域までこの定義によつて網羅することができる。最近革新についてこの点にふれた議論としてはC・S・ソロ（Carolyn Show Solo）の『資本主義過程における革新—シムペーター学説の批判—（Innovation in the Capitalist Process: A Critique of the Schumpeterian Theory, *Quarterly Journal of Economics*, LXV, 1951, 417—38）を参照

資本財源の蓄積の結果を経て、社会の生産力に関する革新の長期の衝突は、またシムペーターのより限定的な生長の定義のうちに含まれていた。すなわち彼は次のようにいう。「われわれは、人口における諸変化を（厳密には年代的配分における）生長という言葉（消極的であれ、積極的であれ）によつて指摘するであらう。そして時蓄総額のうちに貨幣単位の購買力における変化のために矯正された蓄積を「Business Cycles’, p.83）

ここにおいてわれわれは、シユムペーターの經濟變動における要因の分類についての修正をもって以下の四つのグループに表現するのである。すなわち (一)人口ならびに單位資本生産高における長期にわたる典型的平均的比率。貨幣使用の習性における諸傾向を包含する長期的な制度上の変化。(二)他の長期的傾向よりも根源的に外部的要因から独立している革新ならびに企業者活動の諸結果。(三)その外部的要因は貨幣的、銀行的な領域でない。(四)貨幣的性格の外部的要因である。

次に、歴史的作業における第二のタイプすなわち、分析的記述についてのワーバートン氏の論述は、シユムペーターが「分析的記述は、その時代の系列の説明を容易ならしめるし、そうして理論上の一つの抑制として有用である」というところにかかわって始まる。

さてシユムペーターのこの説明は、いわば分析的記述が産業變動の過程について幾分かわれわれに教えるところがあり、また經濟構造に関する分析的記述の結果は、われわれにとって有意義であるという意味のもと

に注目したのである。(“Historical Approach to the

Analysis of Business Cycles,” p.154) しかしながら外部的要因の特定のなグループの重要性を概括する場合には、分析的記述は、長期的な時間系列におけると同様に不可欠である。われわれはこのような問題解明のために歴史的作業のこのタイプにしたがわねばならないのである。すなわち外部的要因の貨幣的法律制定にとっては、どのような原因が存在するのか。そして夫夫の場合における、法律制定の性格は何であったのか。またどのような他の金發見が、それらの外部的要因の衝突の指示にとって、銀行的・貨幣的統計の精査を要請するために眞実影響的であったのか。またどのような機会が特定のな中央銀行の決断や、そうしてインフレーションおよびデフレーションを起すことを支配している政府権力の決定となつたのか。そうしてそれらの決定の性格は一体何であつたのか。等の問題においてである。

さて歴史的作業の第三のタイプすなわち産業的、場

所のモノグラフであるが、シムムペーターは同一計画にしたがって整序された産業上の設定的な夥しいモノグラフの集菓や、そうして生産および消費機能における絶えまない歴史的变化に対して、一般的注意を与えるのである。また他方指導的職員の行動および質に一般的注目を与えることを要求する。(Ibid. p.154)

ともかくこのようなモノグラフ研究についてのシムムペーターの議論は、外部的要因の衝動を性格的に貨幣的であるか、非貨幣的であるかどうかと外部に探し出すよりは、むしろ革新から結果的に現れる経済変化の特定のな状態の詮索の場合に、これらのモノグラフ的研究は、有用であると考えて叙述しているのである。

確にそうである。しかしながら、衝動の衝撃の孤立に向つて方向づけた歴史的作業において、非常に重要であり必要であるだろう一つのモノグラフ的研究のグループが存在する。これらのモノグラフ的研究は、衝動を起す勢力の特定のなタイプならびにそれらの勢力の作用の特定のな状態の研究であるわけである。貨幣要

因に集中した景気変動研究において、景気にとつての衝動の創造者のように銀行組織についてのモノグラフ的な研究をすることは、欠くことのできないものである。ともあれ景気変動分析の方法論に対するシムムペーターの貢献は、貨幣要因の孤立について正しく判断したことであつた。そうしてそれらの貨幣的要因の衝突は、いわゆる要因の分類に、限定されるものでもなく、また歴史的研究を顧慮する彼の暗示に制限されるでもない。貨幣・価格・生産高・雇傭ならびに均衡に関する理論の叙述の局面もかような方法論の発展に寄与するのである。とはいふものの、シムムペーターのそのすぐれた論議は、いくつかの点で修正されなければならぬのである。しかしながらシムムペーターの労作のこれらの理論的局面は、概念の定義および適用を包含しているのである。すなわち

- (a) 貨幣流出量
- (b) 貨幣量
- (c) 貨幣の所得
- (d) 価格水準あるいは貨幣単位の価値
- (e) 総生産速度
- (f) 交換方程式
- (g) 国民所得計算組織
- (h) 均衡接近

(i) 平衡勢力 (j) 期待、等がそれである。これらの各各の概念についてのシムムペーターの見解ならびに必要な修正がここに要約されるのである。

周知のように経済変化ならびに景気変動に関するシムムペーターの分析の端緒的な立場は貨幣流出反復量の概念である。 (“The Theory of Economic Development,” chap. i, pp. 1—56 and “Business Cycles,” pp. 35—38) しかしこの概念は、明らかに二つの要素で

組成されたものである。すなわち貨幣量と貨幣使用の割合である。そこでシムムペーターは、前者を測定するために、アメリカ合衆国大蔵省の預金残高の追加によって調整された預金総額、およびシリーズに記録され公表されている通貨と実質的に等しい概念を使用したのである。ところでこの概念は、しばしば有期預金を排除して用いられた狭い概念よりも、観察の実践的な点からして有用であるという理由を表示した一九二〇年代の発展についての説明を記述していると実質的に等しい。(“Business Cycles” pp. 851—57 and 591

—92; “The Decade of the Twenties,” p. 2) 次に後者すなわち貨幣使用の割合については、^{*} いわば所得速度の概念の形成をなすしめたのである。

* ワーバートン氏はこの点について A. W. マージェント (Arthur W. Marget) 氏の『シムムペーター学説の貨幣的局面』 (“The Monetary Aspects of the Schumpeterian System”, Review of Economic Statistics, xxxIII (1951)) に引かれている。マージェント氏はシムムペーターを所得速度の公式化における現代経済学者中、すぐれた学者であるとしている。

シムムペーターは所得速度の概念について、二つの変形を使用したのである。(一) 純所得速度 (二) 総体所得速度がそれである。 (“Business Cycles”, p. 545) ここで注意をしなければならないのは、後者とほとんど類似しているけれども、決して等しいものではない一つの変体がある。すなわちそれは、貨幣量によって分割された最終生産物のための支出額である。J. ヴァイナー (Jacob Viner) はこれを「最終購買速度」 (final purchases velocity) と表現しているが、^{*} ワーバートン氏はこれを「巡回速度」 (circuit velocity)

とよぶこととしてゐるといふ。^{*}

* Jacob Viner, "Studies in the Theory of International Trade, New York: Harper & Bros., p.367

** "The Secular Trend in Monetary Velocity," and "The Theory of Turning Points in Business Fluctuations" Quarterly Journal of Economics, LXIII and LXIV 525-49

われわれは紙幅の關係上、いわゆる歴史的研究所概念の定義ならびにその適用について一つ一つのワーバートン氏の考察を割愛しなければならない。単に以上、

(a) (b) (c) についてのみ紹介しておくにとどめる。

(C)

シムムベーターの景気変動理論に対する方法的吟味・批判の後、ワーバートン氏は、以下に紹介するような結論的覺書を附記する。われわれはその所論を要約しておくことにする。

先ず最初にいえることは、シムムベーター學説は衝動理論を除外して、二つの主要な局面をもっている

ということである。すなわち(一)發展の理論あるいは資本主義過程の分析の理論であり。(二)資本主義のもとにおける回帰的景気変動の理論がそうである。後者はある觀念においては、前者の一分野であるかもしれないが、決して必然的な分野でもなく結果でもない、いわば二つの仮定にもとづくものである。ところでその仮定というものは、(a)企業者活動が、いわゆる「循環」として認識される景気変動の根源的な原因であるためには、全く不規則に作用している。(b)銀行組織の作用が、起動力的要因ではないとはいえ、その作用は「循環」として認識される変動において強調的な要素であるといふことができる等の仮定である。しかしながらこの二つの仮定自体に先ずもって弱点がひそんでおり、またこれらの仮定を支持する証拠の不充分さといふことがシムムベーター景気循環論についての最も重大な一般的な批判の第一といふことができる。^{*}

* ワーバートン氏はシムムベーターの景気循環理論に対する學者の論稿として次の雑誌の諸文献の参照を乞う

Simon Kuznets, *American Economic Review*, XXX
(1940), 262—61

Oscar Lange, *Review of Economic Statistics*, XXIII
(1941) 192

E. Rothbarth, *Economic Journal*, LII (1942), 226—28

第二には、過去のいわゆる景気変動理論に関する多くの研究者達の結論と矛盾することである。(特に銀行および貨幣組織の作用、ならびに歴史的発展に最も通暁している学者と) それでもし前にのべた二つの仮定が廃棄されていたとしたならば、シユムペーター学説は重大にもどんな状態に変化させられていたであろうか。

理論的モデルとして、シユムペーター学説(深淵な不景気および他の攪乱についての衝動理論も含めて)について比較的にとるに足らない修正のみがこれらの二つの仮定を廃棄するために必要とされるのである。そこで要求されることは、景気循環の分析学者達によ

って記録された景気低下の殆んどが単に深淵な不景気の暗黒な状態ではなく、銀行ならびに貨幣組織を連想した外部的要因の結果である——あるいは、より一層特殊的に貨幣的不均衡のうちに生ずる——とする、その学者達の立場において仮定することである。すると企業者の革新的活動が、資本主義のもとにおいて経済発展の躍動的部分であるという仮定および、資本主義自体の性格に考察のホコを向けるシユムペーター学説の他のいろいろな仮定は廃棄される必要はないのである。只要求される修正というのは、早晩、革新の群生がそれ自体(すなわち銀行的なそうして貨幣的な組織の中で起っている勢力の不均衡の喪失において)によってとりあげる場合のみである。けれどもそれは、景気循環を生ずる傾向であるかもしれないが、国民経済研究所の参考的期日のような、かような尺度によって同一視された景気循環の大きさの変動を生ずるのではない。この変動について、シユムペーターが多くの芒刺をなげかけた景気変動の貨幣的理論と彼の学説との

間には、矛盾はないはずである。事実、不景気およびインフレーションの因果関係について、銀行的、貨幣的理論に関する殆んどの賛成者は、資本主義の下における企業者の役割に注目をなしたシムムペーターの学説を、もっともものことと考えている。仮定されたように、革新の勢力は存在するし、そうしてそれは、経済の作用のうちで根本的に重要なものであるということができる。ともかく貨幣的膨脹・収縮を欠く場合、（合理的な生長、および季節的变化より他に）革新の勢力は、経済進歩率における変化に関して主な勢力の衝撃をもっているように考察されるのである。シムムペーター学説のこの併合および景気変動の貨幣理論は——もしも統計的・歴史的研究の成果によって立証されていたならば——議会によって経済顧問会議へしめされた作業にとって、適切な基礎を与えていたかもしれないということができよう。